

國學院大學學術情報リポジトリ

The form, meaning and use of baby-talk VN suru constructions : an analysis of nenne suru and nainai suru constructions

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 鈴木, 陽子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000800

幼児語「VN する」構文の形式と意味

—「ねんねする」構文と「ないないする」構文の分析—

鈴木 陽子

キーワード

動詞習得 動詞の活用形 幼児語 自動詞・他動詞 インプット 頻度

1. 問題提起

日本語には「研究」や「心配」など形態的には名詞でありながら、意味としては活動や状態変化を表し、「言語学の研究」のように項をとるという点では動詞と似た性質を持つ verbal noun (動名詞, 以下 VN) と呼ばれる名詞が存在する。VN はサ変動詞「する」と組み合わさって「VN する」という形で完全な動詞として機能する (Martin, 1973; Tsujimura, 1996)。「VN する」には、「勉強する」といった漢語を起源とするものから、英語を起源とするもの (e.g., 「スキップする」), 和語を起源とするもの (e.g., 「だっこする」) までさまざまである。「VN する」構文は Grimshaw and Mester (1988) 以来, (1) に挙げられるような軽動詞構文との関連で議論されてきた。(1a) と (1b) の意味には大きな違いがないものの, (1a) では述部の「研究」が軽動詞「する」の目的語, すなわち名詞として働き, (1b) では「研究」が「する」と結びついて動詞そのものとして働く (Uchida and Nakayama, 1993)。

- (1) a. 研究をする。(軽動詞構文)
- b. 研究する。(「VN する」構文)

さらに、VN は表層的には (2) のように明示的な動詞なしに格を付与できるように見えることから、VN が名詞なのか動詞なのか、それともその中間的なものなのか、その統語カテゴリーの地位が問題視されてきた (Sato, 2000a, 2000b)。

(2) [ジョンがアイヌ語を研究中] にそのことがあった。(Sato and Yamashita, 2006)

子どもが話す初期の日本語の中にも「ねんね」のようにVNと同じ特徴を持つ幼児語VNと呼ばれる語が豊富に観察される。例えば、Yamashita (1995) は2歳前の10人の子どもの調査から、「ねんね」、「ばいばい」、「ないない」が最も頻繁に多くの子どもに共通して使用されていた幼児語VNであることを明らかにし、動詞が発話できるようになる前の時期から子どもがこれらの幼児語VNを動詞のような意味を担う語、すなわち活動や状態変化を表す語として使用することを報告している。さらに、同じような幼児語VNを子どもとの対話の中で大人である養育者も使用する。

本稿では、幼児語VN⁽¹⁾として使用頻度が高く、また先行研究でも既に取り上げられている「ねんねする」構文と「ないないする」構文を対象に、親子談話の中でそれぞれの構文がどのような形式と意味で使用されているのかを分析する。成人語と幼児語のVNの獲得研究としてはOshima-Takane, Miyata, and Naka (2000) が、VNを含む育児語／幼児語から成人語への発達と養育者の使用とが関連していることを示した研究には、小椋・村瀬・山下 (1992) や小椋・吉本・坪田 (1997)、村瀬・小椋・山下 (2007) などが挙げられる。

「ねんねする」と「ないないする」の2つの構文を扱うひとつの理由は、この2つの動詞がともに「VNする」という形を共有しているものの、前者は自動詞であり後者は他動詞であることが挙げられる。日本語では、「割る／割れる」や「つなぐ／つながる」のように自動詞と他動詞の対応関係が明示的な動詞接辞によって示されるが、この例外となるのがVNを完全な動詞として使用する際に使われるサ変動詞「する」である。VNが動詞「する」と共に使われる場合、これらのサ変動詞は動詞の自他交替にかかわる派生接辞を持たないため、同じ形式が「発生する」のような自動詞のみのもの、「爆破する」のような他動詞のみのもの、「拡大する」のような自他両用のものの3つの種類を含むことになる(影山, 1996)。このことを第一言語習得の文脈において考えてみるならば、子どもは「VNする」という同じ形式で表される動詞が自動詞として機能するか他動詞として機能するかを形態的ではなく、個々の意味の要素を手がかりに学ばなければならないことになるが、日本語の話し言葉では目的語を標示する格標識「を」が頻繁に落ち(大久保, 1967)、動

詞の項となる名詞句も談話の中で推測可能である場合には自由に省略されるため、自動詞と他動詞の区別はさらに難しいものとなる。それでは、子どもはどのような情報を手がかりに「VNする」が自動詞として機能するか、他動詞として機能するかを理解するのだろうか。本稿は「ねんねする」と「ないないする」の使用を詳細に分析することにより、「VNする」動詞が自動詞と他動詞の習得とどのように関わるかについて考察を行う。

また、前述したようにこの2つの構文は頻繁に多くの子どもに共通して使われる「VNする」構文であり、幼児語動詞が持つ般化の特徴を明らかにするためにもこの2つの動詞は適当である。小椋・村瀬・山下(1992)や小椋・吉本・坪田(1997)、岡本(1982)は初期の習得の特徴として、ひとつの語をその語の慣用の意味範囲を超えて過度に拡張して使用する、般化や般用を挙げ、さまざまな観察をしている。例えば、子どもは「ブーブー」をバスやバイクなど乗り物全般を表すために用い、「マンマ」をあらゆる食物を表すために用いる。しかし、このような分析の多くは幼児語の名詞を扱ったものがほとんどであり、「ねんねする」のような幼児語「VNする」動詞が養育者と子どもにどのように使用され、般化されているのかを分析した研究は少ない。幼児語「VNする」の研究としてはYamashita(1995)があるが、Yamashita(1995)は「ねんね(する)」と「ないない(する)」のそれぞれの意味を“(do) sleeping”,“(do) putting away”と分析している。しかし、果たしてこの2つの構文の意味はこれ程に単純なものなのだろうか。例えば、「ねんねする」は「眠る」という意味と同時に、睡眠の要素の伴わない「横になる」の意味で使われることはないのだろうか。また、「ねんねする」が「(～を)横にする」のように他動詞として使用される可能性はないのだろうか。本稿では、このような問題意識から2つの「VNする」構文を対象に幼児語動詞の使用について分析する。

養育者からの発話、すなわちインプットが子どもの言語発達に与える効果についても注目する。第一言語習得研究においてVNは、生成文法によるアプローチからは名詞や動詞といった統語カテゴリーの習得との関連で引き合いに出され、VNの持つ中間的な性質が注目されてきた(Yamashita, 1995, 1999; Sato, 2000a, 2000b)。Yamashita(1995)は10人の子どもの発話データを対象に[名詞]、[VN]、[動詞]というカテゴリーについて子どもと養育者の発話を調査した。その結果、養育者からのインプットではトークン頻度とタイプ頻度共に[名詞]、[動詞]、[VN]の順に使用頻度が高いにも関わらず、子どもの産出データでは[名詞]、[VN]、[動詞]の順に頻度が高かったことが分かった。このことは、子どもはインプットとしてはVNよりも動詞を頻繁に聞いているにも関わらず、動詞よりもVNを早く習得するというインプットと発達順序との不一致を報告している。しかし、あらゆる事象について幼児語VNが存在するわけではないことを考慮すると、

Yamashita (1995) の分析手法は幼児語の VN を持たないようなものもすべて含めて比較してしまうため、動詞の使用頻度が VN よりも高くなるのは当然のようにも思われる。特定のイベントを表す動詞に特化し、「VN する」と普通動詞とを比較すれば、Yamashita (1995) で示されたインプットと発達順序の不一致は解消されるのではないか。本稿はこの可能性についても検討する。

また、「VN する」は動詞習得の終着点では決してないことも重要である。幼児語としての「VN する」に代わり、子どもは意味の対応する一般動詞、例えば「ねんねする」に対して「寝る」や「ないないする」に対して「片付ける」などを学習していかなければならない。そこで、本稿では「ねんねする」と「寝る」、「ないないする」と「片付ける」のペアを事例として取り上げ、それぞれがどのような時期にどのような頻度で発話され、どのような推移を辿るのかを観察し、動詞習得一般の問題と関連させて考察を試みたい。育児語・幼児語の成人語化を扱っている研究には小椋・村瀬・山下(1992)があるが、特定のイベントを表す幼児語動詞がどのように成人語化するかを扱っている研究はまだまだ不十分であるように思われる。

本研究の分析は以上のような問題意識から VN の使用のなかでも動詞として使用される「VN する」が中心となる。VN を用いた発話には、動詞「する」の伴わないものもあり、そのなかには「する」が省略されていると解釈できるような場合(例3)や、VN が名詞として使われ、助詞「は」によってトピック化されている場合(例4)、VN がコピュラ文の述語名詞になる場合もあるが(例5)、これらの使用については本研究の分析対象からは外す。

(3) Aki 2:01.24 〈文脈: 母親と絵本を読んでいる〉

母親: わにさんとねんねしてる。

子ども: わに。

母親: わにさんとねんね。

(4) Ryo 1:03.20 〈文脈: おもちゃを片付ける〉

母親: ないないして!

子ども: (行動: おもちゃをバスケットに入れる)

母親: ないないはしないの?

(5) Tar 2:03.01 〈文脈: 母親が Tar の弟を寝かせにいく〉

母 親: こっち いま から じろう ねんね だから ね.

2. データと分析方法

2. 1 データ

分析には CHILDES (MacWhinney, 2000) から 6 人の男児の発話データ Taro (以下 Tar; Hamasaki, 2004), Jun (Ishii, 2004), Aki, Ryo, Tai (Miyata, 2004), Sumihare (以下 Sum; Noji and Miyata, 2004) を使用した。それぞれのデータに関する情報は表 1 にまとめた。また, Sum 以外の 5 つのデータの収集方法は親や兄弟と遊んでいる様子を録音した自然発話データであるのに対し, Sum は日記形式で集められたデータである。

解析プログラム CLAN を使用して “nenne” と “nainai” を含む養育者と子どもの発話を抽出した結果, 「ねんね (する)」について 1058 発話 (養育者: 517, 子ども: 541), 「ないない (する)」について 474 発話 (養育者: 237, 子ども: 237) が得られた。

表 1 分析データの概要

対象児	年齢	観察期間	観察頻度	観察回数	平均観察時間
Tar	2:02. - 3:04.	16 ヶ月	2-3 回 / 月	32 回	10 ~ 30 分
Jun	0:06. - 3:08.	36 ヶ月	4 回 / 月	100 回	15 分
Aki	1:05. - 3:00.	19 ヶ月	4 回 / 月	56 回	1 時間
Ryo	1:04. - 3:00.	20 ヶ月	4 回 / 月	82 回	30 ~ 40 分
Tai	1:05. - 3:02.	21 ヶ月	4 回 / 月	75 回	30 ~ 40 分
Sum	0:01. - 7:00.	84 ヶ月	不定期	98 回	N/A

2. 2 分析方法

本研究は上記のデータを対象に「ねんねする」構文と「ないないする」構文の形式と意味について以下の手順で分析を行った。

まず, 2 つの構文の形式について, (i) VN にサ変動詞「する」が付加されているか, このとき動詞「する」の活用形はどのようになっているか, (ii) それぞれの構文の発話に現れる名詞句の分布はどうか, (iii) 発話される名詞句が格標示されているかという 3 つの観点から分析を行った。現れる名詞句については, 「ねんねする」は自動詞, 「ないないする」は他動詞であることを想定し, 前者については行為者を表す名詞句を, 後者につ

いては行為者と行為の対象を表す名詞句を必要な要素と捉え、それぞれの名詞句が発話に現れる頻度を集計した。このとき、文脈が不十分であるため判断が難しい発話や「ねんねさせる」のように使役構文で使用される発話、自動詞と他動詞の区別が難しい発話については「未分類」とし、発話のなかにどのような名詞句も現れない場合には「無し」として分類した。格標示については、名詞句がどの助詞によって格標示されているかを集計し、格標示が省略されているものについてはゼロ格「〇」として分析した。

それぞれの構文の意味については、発話が行われた文脈や発話者の動作などの情報を考慮に入れながら、養育者と子どもが何を対象にどのような意味でこれらの構文を発話しているのかその使用を体系的に記述した。

3. 結果

3. 1 「ねんねする」構文と「ないないする」構文の形式

3. 1. 1 サ変動詞「する」の有無と動詞の活用形

養育者の発話を見ると、「ねんね」を含む発話(517発話)のうち73.5%(380発話)、「ないない」を含む発話(237発話)の63.3%(150発話)はサ変動詞「する」のついた完全な動詞としての使用であった。子どもの発話では、「ねんね」を含む2語以上の発話(399発話)のうち67.7%(270発話)が、「ないない」を含む2語以上の発話(142発話)の72.5%(103発話)が完全な動詞として発話されていた。動詞「する」が付加される場合の動詞の活用形を使用頻度の高いものから3タイプずつ挙げると、「ねんねする」については表2と表3、「ないないする」については表4と表5にまとめられる。

表2 養育者：使用頻度の高い「ねんねする」の活用形とその割合(%)

	Tar (n ⁽²⁾ =102)		Jun (n=60)		Aki (n=91)		Ryo (n=12)		Tai (n=51)		Sum (n=64)	
する	46.1	してる	33.3	してる	39.6	する	25.0	してる	17.6	した	20.3	
						してる	25.0	しちゃった	17.6			
してる	10.8	する	21.7	する	16.5	した	16.7	する	5.7	する	18.8	
				した	16.5							
しない	7.8											
しよう	7.8	しよう	11.7	しちゃった	6.6			しよう	11.8	しなさい	12.5	

表3 子ども：使用頻度の高い「ねんねする」の活用形とその割合 (%)

Tar (n=6)	Jun (n=24)	Aki (n=11)	Ryo (n=4)	Tai (n=36)	Sum (n=189)
する	66.7	してる	25.0	してる	36.4
			する	25.0	して
			して	25.0	した
			したい	25.0	
			してた	25.0	
しよう	33.3	した	20.8	して	27.3
				した	13.9
				する	16.9
		する	16.7	した	18.2
		しな	16.7	する	18.2
					しよう
					13.2

表4 養育者：使用頻度の高い「ないないする」の活用形とその割合 (%)

Tar (n=56)	Jun (n=37)	Aki (n=1)	Ryo (n=18)	Tai (n=18)	Sum (n=20)
して	55.4	した	29.7	する	100.0
			して	27.8	して
			してる	27.8	して
しよう	10.7	して	24.3	しよう	16.7
				する	16.7
				しよう	11.1
				しとこう	15.0
する	8.9	する	13.5		した
					10.0

表5 子ども：使用頻度の高い「ないないする」の活用形とその割合 (%)

Tar (n=4)	Jun (n=14)	Sum (n=85)
する	50.0	した
		71.4
		して
		21.2
	しよう	21.4
		しとこう
		17.6
		した
		15.3

養育者（表2と表4）と子ども（表3と表5）の使用頻度を比較すると、使用頻度の高い動詞「する」の活用形は子どもにより異なるが、子どもが高い頻度で使用している活用形の多くが同じデータの養育者に高い頻度に使われている活用形と一致していることが分かる。例えば、Tarでは「ねんねする」という形が、Junでは「ねんねしてる」が養育者と子どもに共通して最も頻繁に使われている。

3. 1. 2 VNする構文に現れる名詞句と格標示

養育者の発話についてそれぞれの構文に現れる名詞句の頻度とその割合をまとめたものが表6と表7, 養育者の発話に現れる名詞句がどのような格で標示されていたかをまとめたものが表8と表9である。

まず, 表6と表7について「無し」(網かけ)のカテゴリーに注目すると, 「ねんねする」の発話(380発話)のうち50.3%(191発話)が, 「ないないする」の発話(150発話)の54.7%(82発話)がどのような名詞句も現れない発話であった。つまり, 養育者の発話の約半数が「VNする」という述語のみから成る発話ということになる。子どもの発話についても, 「ねんねする」の発話(270発話)のうち44.1%(119発話)が, 「ないないする」の発話(103発話)の42.7%(44発話)が名詞句の全く現れない発話であった。このように談話における実際の使用を観察すると, 「VNする」構文と共起可能な名詞句の約半数は省略されていることが分かる。

表6 養育者の「ねんねする」構文に現れる名詞句(括弧内は割合%)

	行為者	無し	未分類	全体
Tar	33 (32.4)	54 (52.9)	0 (0.0)	102
Jun	10 (16.7)	32 (61.7)	9 (15.0)	60
Aki	29 (31.9)	48 (52.7)	14 (15.4)	91
Ryo	2 (16.7)	8 (66.7)	0 (0.0)	12
Tai	14 (27.5)	25 (49.0)	8 (15.7)	51
Sum	28 (43.8)	24 (37.5)	5 (7.8)	64
計	116 (30.5)	191 (50.3)	36 (9.5)	380

表7 養育者の「ないないする」構文に現れる名詞句(括弧内は割合%)

	行為者	対象	無し	未分類	全体
Tar	1 (1.8)	23 (41.1)	25 (44.6)	0 (0.0)	56
Jun	0 (0.0)	13 (35.1)	19 (51.4)	3 (8.1)	37
Aki	0 (0.0)	0 (0.0)	1(100.0)	0 (0.0)	1
Ryo	0 (0.0)	2 (11.1)	16 (88.9)	0 (0.0)	18
Tai	0 (0.0)	6 (33.3)	12 (66.7)	0 (0.0)	18
Sum	2 (1.0)	9 (45.0)	9 (45.0)	0 (0.0)	20
計	3 (2.0)	53 (35.3)	82 (54.7)	3 (2.0)	150

表8 養育者の「ねんねする」発話における名詞句の格標示（括弧内は割合 %）

	行為者名詞句を表示する格表示			
	が	は	も	Ø
Tar	3 (9.1)	3 (9.1)	10 (30.3)	17 (51.5)
Jun	2 (20.0)	1 (10.0)	1 (10.0)	6 (60.0)
Aki	2 (6.9)	3 (10.3)	2 (6.9)	22 (75.9)
Ryo	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (100.0)
Tai	1 (7.1)	1 (7.1)	3 (21.4)	9 (64.3)
Sum	4 (14.3)	5 (17.9)	6 (21.4)	13 (46.4)
計	12 (10.3)	13 (11.2)	22 (19.0)	69 (59.5)

表9 養育者の「ないないする」発話における名詞句の格標示（括弧内は割合 %）

	行為者		対象		
	が	Ø	を	も	Ø
Tar	0 (0.0)	1 (100.0)	1 (4.3)	1 (4.3)	21 (91.3)
Jun	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (7.7)	0 (0.0)	12 (92.3)
Aki	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
Ryo	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (100.0)
Tai	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	6 (100.0)
Sum	1 (50.0)	1 (50.0)	1 (11.1)	1 (11.1)	7 (77.8)
計	1 (33.3)	2 (66.7)	3 (5.7)	2 (3.8)	48 (90.6)

名詞句が発話のなかに明示される場合、「ねんねする」については行為者を表す名詞句が30.5%（380発話中116発話）の割合で現れている。一方、「ないないする」は、対象を表す名詞句は35.3%（150発話中53発話）の割合で発話されているものの、行為者名詞句は2%（150発話中3発話）しか現れない。したがって、「ねんねする」と「ないないする」は「VNする」という形を共有してはいるものの、発話に具現化される名詞句の意味役割には大きな違いがあることが分かる。さらに、表8と表9から分かるように、発話に現れる名詞句の半数以上、すなわち「ねんねする」の行為者名詞句で59.5%（116発話中69発話）、「ないないする」の行為者名詞句で66.7%（3発話中2発話、対象名詞句で90.6%（53発話中48発話）が助詞によって格標示されていない。別の観方をするならば、「ねんねする」構文における行為者名詞句が「が」によって標示される発話が全体の10.3%にすぎず、「ないないする」構文における対象名詞句が「を」によって標示される発話が全体の5.7%にすぎないことを示している。また、子どもの発話（Sumデータ）でも同様に、「ねんね

する」構文において行為者が標示される発話は全体の4% (101発話中4発話), 「ないないする」構文において対象が「を」で標示される発話は7% (41発話中3発話) にとどまっている。

3. 2 「ねんねする」構文と「ないないする」構文の意味

3. 2. 1 「ねんねする」構文の意味

「ねんねする」構文の意味は, Yamashita (1995) が字義的意味として“(do) sleeping”と表記するにとどまっており, 実際にこの構文がどのような意味で使用されているのかについては, あまり注意が払われてこなかった。しかし, 自然発話データを観察してみると, 「ねんねする」構文は概ね「寝る」と似た機能で使用されるものの, 多様な文脈において「寝る」よりも広い範囲で使用されていることが分かる。(6)は当該構文の養育者の使用をまとめたものである。これらを見ると, 「ねんねする」は「眠る」の意味だけにとどまらず, 「寝つく」や物理的状态変化を表す「横になる」など広い意味を担って使われている。

(6) 「ねんねする」構文の養育者の発話⁽³⁾

(ア) 睡眠の要素を含む意味

a. 「ベッドに入る, 床につく」:

母 親: たあちゃん, はみがいてから ねんねしないと。(Tar 3;03.02)

b. 「寝つく」:

母 親: じろちゃんが ねんねしたら いっしょにあそぼうよ。(Tar 3;02.03)

c. 「眠る」:

母 親: れえちゃん ねんねしてる からね。(Aki 2;00.26)

d. 「(～を) 寝かしつける」:

母 親: たろう ちょっとまって。

母 親: じろう ねんねしてくる からね。(Tar 2;03.01)

(イ) 物理的状态変化を表す意味

e. 「横になる」:

母 親: ねんねしないで すわってみるんだよ。(Tar 2;07.18)

f. 「(～を) 横にする」:

父 親: わんわん ねんねえ してください。(Jun 1;06.16)

中でも特異な使用が(6d)や(6f)である。「ねんねする」は主に自動詞として機能するが,

「(～を)寝かしつける」や「(～を)横にする」のように使役動詞の意味としても解釈可能な使用が頻度こそ低いものの観察される。例えば、(6f)などは父親が子どもに対して動物のおもちゃを横に倒すよう要求している場面で使用されており、子どもは父親の指示しに従って次々に動物たちを横に倒していくのである。しかし、明示的に名詞句が「を」によって標示されていないため、これらを他動詞的用法と決定するのは難しいかもしれない。おもちゃ自体は自ら動くことができないため、養育者がおもちゃを擬人化し、子どもに対してではなく擬人化されたおもちゃに対して呼びかけているとも解釈できるだろう。

子どもの「ねんねする」構文の発話を観察すると、子どもも(7)に示すような広範囲の文脈において「ねんねする」を使用している。このように「ねんねする」が表す意味範囲は広いが、「参加者が直立した状態(活性化された状態)から横たえられた状態(不活性化された状態)へと変化する」という点においては共通性がみられる。

(7) 「ねんねする」構文の子どもの発話

(ア) 睡眠の要素を含む意味

a. 「ベッドに入る, 床につく」:

子ども: とうちゃん もう ねんね ちまちょう. (Sum 2;03.)

b. 「寝つく」:

子ども: よっと [: やっと] ねんね した? (Sum 2;00.)

c. 「眠る」:

子ども: よお ねんね した. (Sum 1;11.)

(イ) 物理的状态変化を表す意味

d. 「横になる」:

子ども: <弟に向かって> ぼく ねんね ちゆる よこ. (Sum 2;01.)

e. 「(～を)横にする」:

<文脈: おもちゃの電車を弟(あかちゃん)の横に寝かせると言う>

子ども: あかちゃん の よこ ねんね する. (Sum 2;01.)

3. 2. 2 「ないないする」構文の意味

「ないないする」構文について養育者の発話を観察すると、(8)に示すように「ないないする」は“(do) putting away”, つまり「片付ける」や「しまう」の意味だけではなく、「置く」や「捨てる」, 「さわらないで!」という禁止の表現, さらには「姿が消える」のような自動詞的な意味など, 「ねんねする」と同様に広い意味で使用されてる。また, 「な

いないする」が用いられる文脈についても、単におもちゃを片付ける文脈だけではなく、食器の片付けや、体温計をしまう場面など多種多様である。

(8) 「ないないする」構文の養育者の発話

a. 「散らばっているもの・場所を整える」:

母 親: よし じゃ パズル を ないない しよう. (Tar 2;10.15)

b. 「入れる」:

母 親: この なか に ないない して, なか に. (Tar 2;06.06)

c. 「置く」: 〈文脈: 食後の片付け〉

母 親: たあちゃん おさら ないない してきて, いつも あらう ところに.
(Tar 3;01.02)

d. 「捨てる」: 〈文脈: 母親がおしめを持っていきながら〉

母 親: これ ないない してくるから. (Tar 3;02.03)

e. 「さわらないで!」: 〈文脈: Ryo がビデオのバッグを見つけて, 中をいじっている〉

母 親: だめ.

母 親: ないない してよ, りょうくん! (Ryo 1;03.03)

f. 「渡す」: 〈文脈: Tai が体温計を持ったまま離さない〉

母 親: たいおんけい.

母 親: うん もう ね しまっておこう?

母 親: また あと ではかってあげるわね.

母 親: ないない.

子ども: 〈不明瞭〉

母 親: もう ないない して!

母 親: ね.

母 親: うん ないない して!

母 親: ね.

母 親: はい ないない してください! (Tai 1;06.11)

g. 「姿が消える」:

子ども: ないない った?

父 親: ないない したよ.

父 親: こわいの ないない したよ.

父 親: いっちゃったよ。(Jun 2:00.17)

子どもの発話を観察すると、子どもは構文習得の早い段階から「ねんねする」のような自動詞との意味の違いを認識し、「ないないする」を他動詞のプロトタイプである「何らかの対象に変化を及ぼす」という意味で使用しているように思われる。(9)に示すように、子どもも早い時期から「ないないする」を特定のひとつの意味に限らず、養育者の使用と対応するさまざまな意味において発話する。このように「ないないする」が表すことのできる意味範囲は多岐に渡るが、どの意味においても「ある特定の対象が子どもの手や視界から離れ、理想とされる位置に移動する」という点において共通性がみられる。

(9) 「ないないする」構文の子どもの発話

a. 「散らばっているもの・場所を整える」:

子ども: ないないしょ。

父 親: なにを ないないすんの?

子ども: みきき [: つみき]。(Jun 2:02.25)

b. 「入れる」: 〈文脈: 母親とおもちゃを片付けている〉

子ども: あれ ないないしなきゃ # だめ。

(少し離れたところにあったおもちゃを拾って持ってきて箱に入れる (Tar 3:03.02))

c. 「置いてくる」:

父 親: じゅんのめんこ?

父 親: おにいちゃんのやろ?

子ども: にかいに ないないしようか?

父 親: え?

子ども: にかいに。(子どもが階段を上っていく (Jun 2:05.25))

d. 「さわらないで!」:

父 親: だめよ。(子どもがモニターで遊んでいる)

子ども: ないない? (Tar 1:10.27)

父 親: ないないしといて。

e. 「(～のために) とっておく, 残しておく」:

子ども: おかあちゃん これもらった。

子ども: せえじくんの おばちゃんにもらったんよ。

子ども: てるきちゃんに ないないしときんちゃい.

母 親: はいはい ありがとう.

(お隣のハタノのおばさんに干し柿を二つもらってきて、1-2のように母に言い、次いで、弟テルキ用に一つ差し出して3のように言う (Sum 3:09))

f. 「見えなくなる, 姿が消える」

子ども: かあちゃん ブランコ ないね.

母 親: ないね.

子ども: ないないした.

(母と近くの公園に行つて、シーソーに乗つて言う。ブランコがみんな取り外してしまつてあるので、このように言う。(Sum 2:01.))

以上のように「ねんねする」構文と「ないないする」構文について養育者と子どもの使用を比較すると、この2つの構文はさまざまな対象に対して、さまざまなイベントで広範囲に使用可能な構文であり、意味の一部が未指定であるような柔軟性を持っていることが観察できる。このようなことから、「ねんねする」や「ないないする」は意味のより細分化された普通動詞とは異なり、雑多な意味を持たせやすい、多様な文脈において広い対象に般化させることができる特徴を持つことが分かる。

4. 考察

4. 1 インプットから得られる情報と自動詞と他動詞の区別への示唆

以上、3つの側面からそれぞれの構文の形式についてみてきたが、子どもが発話するそれぞれの構文の形式は動詞「する」の活用パターンや名詞句の明示パターン、格標示パターンにおいていずれも養育者の分布と似た傾向を示していた。このような結果は子どもの特定の動詞の使用がインプットにおける母親の使用と密接に関わることを指摘した Theakston, Lieven, Pine, and Rowland (2001) や韓国語における養育者と子どもの談話を分析した Clancy (1993) の主張とも一致し、インプットの影響力の大きさを示唆するものである。また、発話において何らかの名詞句が明示される場合には、「ねんねする」では行為者を表す名詞句が、「ないないする」では行為の対象を表す名詞句が発話の中に明示される傾向にあったが、これは別の観方をすれば、自動詞「ねんねする」では行為者を表す名詞句が省略されにくいのに対し、他動詞「ないないする」では行為者を表す名詞句が省略されやすいということを表している。この結果は Preferred Argument Structure に基づいて

韓国語を分析した Clancy (1993, 2003) や Guerriero, Oshima-Takane, and Kuriyama (2009) の日本語の分析結果とも一致する。

それでは、以上のような「ねんねする」と「ないないする」の比較から、さらに大きな自動詞と他動詞の区別の問題を捉えるならばどのように考えることができるだろうか。例えば、今までみてきたような養育者の使用の分布から子どもがことばを学習するという観点に立つならば、自動詞としての「ねんねする」と他動詞としての「ないないする」を区別するために必要な情報はインプットの中に驚くほど少ないことが分かる。まず、養育者の発話の約半数は述語のみの発話であるため、2つの動詞は同じ [VN+ する] という形式をとる。そして、発話に明示される名詞句のほとんどが格標示されないため、また日本語の語順では行為者を表す名詞句も対象を表す名詞句も述語の前に現れるため、表層では (10) と (11) に示すように [NP VN+ する] という同じ形式で発話されることになる。

(10) NP (行為者) VN (ねんね) する

(11) NP (対象) VN (ないない) する

このことは自動詞として機能する「ねんねする」と他動詞として機能する「ないないする」との意味の違いを理解するための手がかりとして、子どもが格標識を主要な要素として利用しているとは考えにくく⁽⁴⁾、発話に現れる名詞句の意味情報など他の情報を頼りにしなければいけないことを示唆している。

4. 2 幼児語 VN から成人語動詞へ：「寝る」「片付ける」の使用との比較

子どもはことばの習得を進めるにあたって、本稿で扱っている「ねんねする」や「ないないする」のような幼児語 VN に代わり、成人語を学んでいかなければならない。本節では、「ねんねする」と「ないないする」と意味的に対応する動詞の例として「寝る」と「片付ける」を挙げ、それぞれの使用頻度を比較することで、Yamashita (1995) が指摘するインプットと発達順序との食い違いを別の視点から再検討したい。

「ねんねする」と「ないないする」の使用とそれぞれに意味的に対応する動詞「寝る」と「片付ける」の使用とを頻度において比較すると、表 10 のようにまとめられる。Yamashita (1995) の分析データでは、対応する「VN する」を持たないようなすべての動詞の頻度も含まれているため、動詞のインプットの頻度が VN のそれよりも高くなっていったのだが、このようにして特定の意味領域に特化して比較すると、養育者と子どもの両方の発話において VN の使用頻度が対応する動詞よりもはるかに高くなっていることが分

かる。この2つの事例を即座に「VNする」全般に当てはめることはできないが、この結果から子どもはやはり養育者からのインプットの頻度による影響からVNを早期に習得するのだろうと考えられる。

表10 「ねんね」「寝る」「ないない」「片付ける」の養育者と子どもの使用頻度

	ねんねする		寝る		ないないする		片付ける	
	養育者	子ども	養育者	子ども	養育者	子ども	養育者	子ども
Tar	160	14	22	5	96	20	22	0
Jun	85	54	6	9	44	30	119	40
Aki	102	109	3	1	4	10	21	4
Ryo	18	20	1	3	40	42	6	15
Tai	73	70	24	25	32	10	19	5
Sum	79	274	10	36	21	125	3	0
計	517	541	66	79	237	237	190	64

また、TaiとSumの2つのデータを対象に使用頻度を時系列の推移にまとめると図1と図2のようになる。これらを見ると、子どもも養育者も早い時期にはVNの方を普通動詞よりも頻繁に使い、VNの使用頻度が低くなる時期(2:02.-2:08.)にVNと入れ替わるようにして対応する動詞を発話し始めていることが分かる。

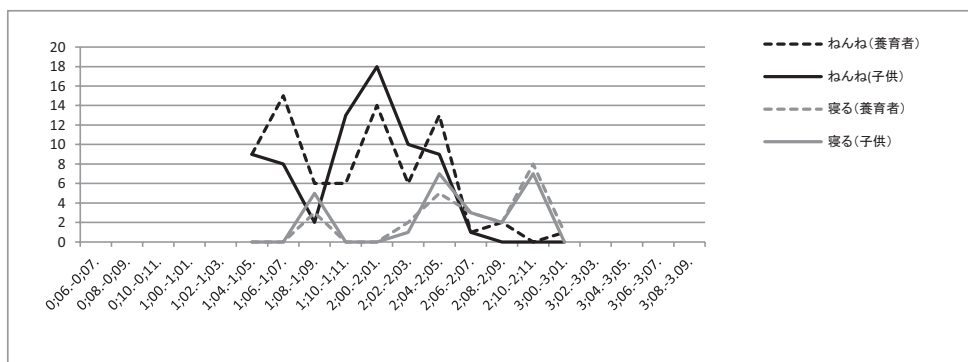


図1 「ねんねする」と「寝る」の比較 (Tai)

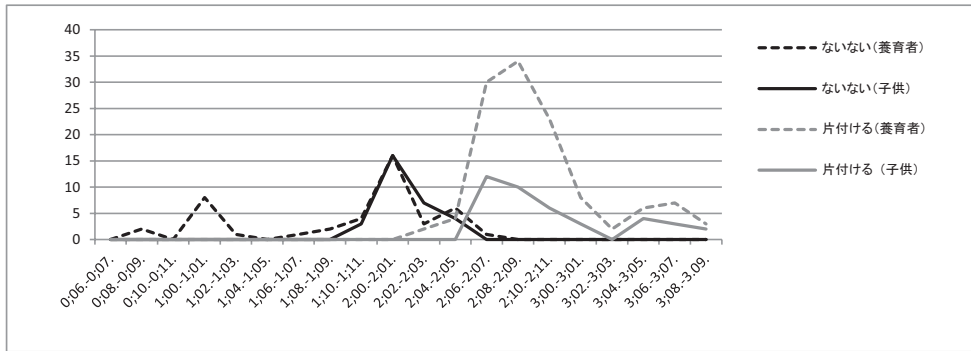


図2 「ないないする」と「片付ける」の比較 (Jun)

4. 3 なぜ「VNする」が動詞よりも先に現れるのか

前節におけるVNと動詞との比較から、少なくとも「ねんねする」と「寝る」, 「ないないする」と「片付ける」の組み合わせにおいてVNが動詞よりも先に現れる傾向を観察することができた。では、「VNする」はなぜ普通動詞よりも先に現れるのだろうか。その理由として、まず一つには4.2.で確認したように、インプットにおける頻度の影響が考えられる。さらに、村瀬・小椋・山下(2007)が指摘するように、幼児語VNには「ねんね」「ないない」「ばいばい」など音韻の反復が多く、発音がしやすいため、子どもの理解や使用が促されるという可能性も考えられる。

次に挙げられるのは、VNは動詞「する」とは独立して使用できるという特徴である。この特徴によって、養育者はVN部分だけを取り出して助詞「は」によってトピック化することができる他、「ないない、ないない」などと子どもに呼びかけながらおもちゃを片付けるということが可能になる。名詞よりも動詞の学習が難しいと言われる理由として、ひとつには場面から動詞の指示対象を切り出すことが難しいこと、それから動詞の般用にあたって動作主体や動作対象の同一性ではなく、それらの間にある関係にこそ注目しなければならないが、このような関係レベルの同一性を般用基準とすることが子どもにとって難しいことが挙げられる(今井・針生, 2007)。トピック化や呼びかけとしてのVNの使用はこれらの難しさを緩和する働きがあると考えられる。つまり、VNをトピック化したり、養育者がおもちゃを片付けるという行為をしながら子どもに「ないない、ないない」と呼びかけ、子どももそれに応じて「ないない、ないない」と発話しながらおもちゃを箱に入れる動作をすることにより、「これがないないするという行為ですよ」という意図がお互いに理解され、普通動詞を学習する場合と比較して実際の動作(意味)と言語形式との対応づけを容易にするのではないかと推察される。

3つ目の要素として「VN する」という形式を早く学習すれば、他の構文への応用が可能であるという利便性が考えられる。動詞を習得する際、子どもはその動詞のさまざまな派生形を同時に学習しなければならない。しかし、ひとつの「VN する」構文を習得し、動詞「する」の活用形を使えるようになれば、他のさまざまなVNと組み合わせて動作や様態を表現することができる。例えば、Sumが動詞「する」を使い始める1:05.から2:00.の時期に「する」を「ねんね」や「ないない」の他にどのような語と組み合わせて使用しているかを観察すると、(12)のようになりリストが出来上がる。

(12) Sumが1:05.から2:00.の時期に発話したその他の「VN する」

かっこする、ちゆるちゆるする、とんとんする、おっきする、ばたばたする、だっこする、あながする、おーらいぼんぼんする、ぐーぐーする、くるくるする、ばちゃんする、がーがーする、しっこする、ブランコする

このようにみると、「VN する」を早くに学習することによって子どもはさまざまな構文へとその使用を拡張させ、表現のバリエーションを増やすことができるのではないかと考えられる。

最後に、「寝る」や「片付ける」とは異なり「ねんねする」や「ないないする」は表現できる意味範囲が広く、般化されやすい。また、本稿で紹介したように、自動詞構文でも他動詞構文でも解釈可能な使用が存在する。「VN する」はこのように非常に般用性の高い言語形式であり、他の動詞や形態的に難しい活用を学習していない段階の子どもでも柔軟に使用できるという点で習得を容易にしているのではないかと考えられる。

5. まとめ

本稿では、「ねんねする」構文と「ないないする」構文を対象を形式と意味について養育者と子どもの使用を分析した。まず、それぞれの構文の形式に着目すると、養育者の発話の約半数がどのような名詞句も発話されない述語のみからなる発話であった。そして、名詞句が発話の中に明示される場合には、「ねんねする」については行為者を表す名詞句が、「ないないする」については対象を表す名詞句が発話されるが、これらのほとんどが「が」や「を」などで格標示されていなかった。そのため、自動詞と他動詞の意味の区別に格標識が有効ではないことが確認された。さらに、以上のような傾向は同じように子どもの発話にも観察され、子どもの動詞の使用がインプットにおける養育者の使用と密接に関わる

ことが明らかとなった。

それぞれの構文の意味に着目すると、養育者は「ねんねする」を「眠る」の意味だけにととまらず「ベッドに入る、床につく」や「寝入る」、「横になる」などさまざまな意味と文脈で使用しており、その中には「(～を)寝かしつける、眠らせる」や「(～を)横にする」など「ねんねする」が他動詞として使用されていると解釈できる例も観察された。「ないないする」についても同様に「片付ける」や「しまう」だけでは表現しきれない広範な使用が観察された。子どもの発話を観察すると、子どもは養育者の使用と対応するさまざまな意味において「ねんねする」と「ないないする」を使用していることが観察された。このように、本研究は「ねんねする」と「ないないする」という幼児語動詞について般化の様子を提示することができた。このような特徴が「VNする」全体に適用可能なものであるのかについては別に検討が必要であるが、このような「VNする」の般用性が子どもにとっての習得のしやすさや使いやすさを可能にし、早期の動詞習得の足場として機能していると考えられる。

「ねんねする」と「ないないする」の使用を意味的に対応する動詞「寝る」と「片付ける」の使用と比較すると、「寝る」と「片付ける」の使用頻度は養育者と子どもの両方の発話において「ねんねする」と「ないないする」の頻度よりも低いことが明らかになった。この結果は、先行研究である Yamashita (1995) の分析では見えてこなかったインプットの効果を明らかにし、特定のイベントに特化して普通動詞と VN を比較するならば、インプットにおける分布は VN の方が高くなるという可能性を示している。

注

- (1) 以降本稿では幼児語 VN を指す語として VN を使用する。
- (2) n はそれぞれのデータのトークン頻度を表す。
- (3) ローマ字表記からひらがなへの変換は筆者による。
- (4) 自動詞、他動詞の意味の区別に格標識が有効でないことは Rispoli (1987, 1988, 1991, 1995) も報告している。

参考文献

- Clancy, P. (1993). Preferred argument structure in Korean acquisition. *The Proceedings of the 25th annual Child Language Research Forum*, 307-314.
- Clancy, P. (2003). The lexicon in interaction: Developmental origins of preferred argument structure in

- Korean. In J. W. DuBois, L. E., Kempf, & W. J. Ahby (Eds.), *Studies in discourse and grammar: Vol. 14. Preferred Argument Structure: Grammar as architecture for function* (pp.81-108). Amsterdam: John Benjamins Publishing.
- Grimshaw, J., & Mester, A. (1988). Light verbs and θ -marking. *Linguistic Inquiry*, 19, 205-232.
- Guerriero, A. M. S., Oshima-Takane, Y. & Kuriyama, Y. (2009). The syntactic distribution of referential forms in child language. In S. Miyata (Ed.), *Development of a developmental index of Japanese and its application to speech developmental disorders* (pp.365-400). Project No. 18330141. Report of the Grant-in-Aid for Scientific Research (B).
- Hamasaki, N. (2004). *Japanese: Hamasaki corpus*. Pittsburgh, PA: TalkBank. ISBN 1-59642-053-7.
- 今井むつみ・針生悦子 (2007) 『レキシコンの構築』東京：岩波書店。
- Ishii, T. (2004). *Japanese: Ishii corpus*. Pittsburgh, PA: TalkBank. ISBN 1-59642-054-5.
- 影山太郎 (1996) 『動詞意味論』東京：くろしお出版。
- MacWhinney, B. (2000). *The CHILDES project: Tools for analyzing talk*. 3rd ed. Vol.2. The Database. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum.
- Martin, S. E. (1973). *Reference grammar of Japanese*. New Haven, CT: Yale University Press.
- Miyata, S. (1992). Wh-questions of the third kind: The strange use of wa-questions in Japanese children. *Bulletin of Aichi Shukutoku Junior College*, 31, 151-155.
- Miyata, S. (2004). *Japanese: Aki corpus*. Pittsburgh, PA: TalkBank. ISBN 1-59642-055-3.
- Miyata, S. (2004). *Japanese: Ryo corpus*. Pittsburgh, PA: TalkBank. ISBN 1-59642-056-1.
- Miyata, S. (2004). *Japanese: Tai corpus*. Pittsburgh, PA: TalkBank. ISBN 1-59642-057-X.
- 村瀬俊樹・小椋たみ子・山下由紀恵 (2007) 「養育者における育児語使用傾向の構造と育児語使用を規定する要因」『社会文化論集 (島根大学法文学部紀要社会文化学科編)』, 4, 17-30.
- Noji, J., Naka, N., & Miyata, S. (2004). *Japanese: Noji corpus*. Pittsburgh, PA: TalkBank. ISBN 1-59642-058-8.
- 岡本夏木 (1982) 『子どもとことば』東京：岩波書店。
- 大久保愛 (1967) 『幼児言語の発達』東京：東京堂出版。
- 小椋たみ子・村瀬俊樹・山下由紀恵 (1992) 「初期言語発達に関する調査 (1) - 幼児語から成人語へ -」『島根大学教育学部紀要 (人文・社会科学)』, 26, 57-63.
- 小椋たみ子・吉本祥江・坪田みのり (1997) 「母親の育児語と子どもの言語発達, 認知発達」『神戸大学発達科学部研究紀要』, 5, 1-14.
- Oshima-Takane, Y., Miyata, S. & Naka, N. (2000). Acquisition of grammatical categories: Role of physical objects and input. *Studies in Language Sciences*, 1, 97-109.

- Rispoli, M. (1987). The acquisition of verbs in Japanese. *First Language*, 7, 183-200.
- Rispoli, M. (1988). Encounters with Japanese verbs: The categorization of transitive and intransitive action verbs. *BLS*, 14, 213-222.
- Rispoli, M. (1991). The acquisition of verb subcategorization in a functionalist framework. *First Language*, 11, 41-63.
- Rispoli, M. (1995). Missing arguments and the acquisition of predicate meaning. In M. Tomasello & W. E. Merriman (eds.), *Beyond names for things: Young children's acquisition of verbs*, pp. 331-352. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum.
- Sato, Y. (2000a). Are verbal nouns verbs or nouns? In Y. Oshima-Takane, Y. Shirai & H. Sirai (eds.), *Studies in Language Sciences 1, SCSS Technical Report* (pp. 83-96). School of Computer and Cognitive Sciences, Institute for Advanced Studies in Artificial Intelligence, Chukyo University.
- Sato, Y. (2000b). Some evidence for a zero light verb in Japanese. *Japanese/Korean Linguistics*, 9, 365-378.
- Theakston, A., Lieven, E., Pine, J. & Rowland, C. (2001). The role of performance limitations in the acquisition of verb argument structure. *Journal of Child Language*, 28, 127-152.
- Tsujimura, N. (1996). *An introduction to Japanese linguistics* (pp. 127-129). Cambridge, MA: Blackwell.
- Uchida, Y., & Nakayama, M. (1993). Japanese verbal noun constructions. *Linguistics*, 31, 623-666.
- Yamashita, Y. (1995). *The emergence of syntactic categories: Evidence from the acquisition of Japanese*. Doctoral dissertation, University of Hawai'i, Manoa.
- Yamashita, Y. (1999). The acquisition of nouns and verbs in young Japanese children: why do verbal nouns emerge early? *The Proceedings of the 23rd annual Boston University Conference on Language Development*, 2, 741-752.